

Title	宇野弘蔵著 経済原論
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.9 (1964. 9) ,p.757(77)-
JaLC DOI	10.14991/001.19640901-0077
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640901-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640901-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

されるであろう。

- (1) 著者には、本書のほかにつきのような業績がある。Labour's Turning Point 1880—1900, 1948, 著者著 Primitive Rebels, 1959. その他、すぐれた論文が多数あることはよく知られている。
- (2) 著者はまた、フランシス・ニュートン (Francis Newton) というペン・ネームで The Jazz Scene, 1961 (Penguin) というジャズ音楽にかんする著書がある。
- (3) この点について、筆者には、つぎのような大塚久雄教授の言葉が印象的である。「いま近代ヨーロッパにおける資本主義の成立というわれわれの当面の視点から眺めるとき、そうした世界史上の巨きな個性的な流れがおよそ次のような形をとることは周知のことと、いってよいと思う。すなわち、古代オリエントで専制諸国家という姿をとってあらわれた貢納制社会→古典古代の地中海周辺におけるギリシア、ローマなどの奴隷制社会→中世ヨーロッパとくにガリアを中心として展開された封建社会→近代西ヨーロッパとりわけイングランド、ネーデルランドを起点として生誕し拡張するにいたった資本主義社会、という世界的発展の段階的進行である(『西洋経済史講座』I岩波書店、緒言一四頁)。またこれに関連して、スコットランド歴史学派の英国資本主義との関係も注目されるべきであって、この点については、水田洋「スコットランド歴史学派」(『経済学史講座』I有斐閣、一九六四年所収)が面白い。(London, 1962, ¥ 3,000)

—一九六四・六・一七—

### 次号目次

論 説	
社会事業の概念……………	青沼吉松
——小島栄次教授の業績を顧みて——	
第一インターナショナルと民族問題(一)……………	飯田 鼎
——マルクス主義とポーランドの解放——	
国内物価と輸出価格の変動……………	川島 楊子
資 料	
企業成長と市場構造……………	原 豊
書 評	
ケール『ベルタン——重農学派の大臣』……………	渡辺 國廣
ロイ・ハロッド編	
『発展途上にある世界における国際貿易理論』……………	深海 博明

新刊紹介

### 新刊紹介

宇野弘蔵著

#### 『経 済 原 論』

今度、岩波全書の一冊として刊行された本書は、内容の基本線においては旧書(一九五三年岩波書店から上下二冊として刊行)と変わるところがない。旧書は、宇野弘蔵氏の戦前からの『資本論』研究にもとづき、『資本論』を展開の基軸として、全く独自の経済学の理論体系を提示されたものであった。しかも、その後今日にいたるまでに、宇野氏の独自の方法論である、原理論・段階論・現状分析という三段階論のうちの原理論に属する部分として、宇野経済学全体系のうちにも位置づけられるに至った。本書はかかる宇野氏自らの発展の新たな段階で旧書を改められたものである。

宇野氏の『資本論』研究は、戦後非常な注目を浴び、また多くの論者が批判を展開し

新刊紹介

た。それは、方法論、価値論(商品論)、恐慌論、商業利潤論、利子論、地代論等にわたり、あらゆる理論問題を覆っている。かかる広範な批判の展開にもかかわらず、宇野氏自身は、何ら原理論での主張を変更する必要がなかったといわれるのは何故であろうか。それは、従来の批判が、単にマルクスの展開と宇野氏の違いにのみ集中し、宇野氏の体系そのものに集中しなかったこと、および、宇野理論を克服する体系が建設されなかったことによるであろう。このような意味において、われわれは宇野氏の問題提起に積極的に取り組んでゆかなくてはならないであろう。

さて、本書は、旧書に比べて、注が新しくなり、その内容も、近年の論議を反映している。とくに著しい特徴と考えられるのは、さきのべた例の三段階論の役割が原理論の随所において旧書に比しより、明確に論ぜられていることである。とくに段階論と原理論の区別と関連性について一層あきらかにされている。宇野氏への批判、とくにその内在的批判の中心が、原理論と段階論との関連という処にあっただけに、それに対する宇野氏の反応

は興味深いものがある。またいま一つ重要なことは、科学とイデオロギーを峻別するという点、したがって原理論を科学として論理的に体系づけるといふ点が本書の前提として強調されていることを看過しえない。

本書は以上のごとく、旧書よりもより原理論的なものとなつていっているといえよう。同時にそのことは、本書が宇野経済学の原論であつて、マルクス経済学の原論ではないということもあきらかにするであろう。われわれはこの『経済学』を、われわれの直面する現代の課題を追求するうちにおいてのみ正しく評価しうることにある。また、それ以外に克服し創造的発展の道はない。(岩波全書・一九六四年五月刊・二二七頁・三五〇円)

—飯田裕康—

小島 清著

#### 『低開発国の貿易』

——貿易開発会議への提案——

一九六〇年代は南北問題の時代であるといわれており、それを象徴する動きとして、国

七七 (七五七)